

留学先国名 : オーストラリア

留学先学校名 : University of Melbourne

留学期間 : 平成 28 年 2 月 12 日 ~ 平成 28 年 11 月 17 日

オーストラリアでの留学生活において、私自身に大きな影響を与えた要素は学校生活と交友関係である。留学先であるメルボルン大学は総合大学であり様々な学部、分野の講義を受講することができた。私は主に自分の専攻分野である社会学に関わる授業を取っていたが、社会学部のないメルボルン大学では直接的に社会学という分野に属する授業はなかった。しかしそれが逆に歴史、文化、言語などの視点から『社会について学ぶ』ことにつながった。例えば、春学期に受講した『現代のオーストラリア (Australia Now)』という授業では毎週オーストラリアの社会(society)について文化、言語、民族、歴史、国際関係、時事問題などの点にそれぞれ注目して学んでいくものだった。この授業は特にオーストラリア国外からの留学生に人気の授業であったため様々な背景を持つ生徒が個々の意見、経験、価値観を共有できる授業だった。また、『アジアの時代 (Asian Century)』や『現代の日本 (Contemporary Japan)』など、日本やアジア諸国の視点から現代社会について考える講義も取っていた。それらの授業の中でも異なる国で生まれ、文化に囲まれ育った学生たちが日本をどのように捉えているのか、また彼らの国や文化と比較するとどのような違いや共通点があるのかなども興味深かった。他にも様々な授業を取ったが、受講した講義はどれも色々な形で本留学の目的であった『専攻分野の理解をより深める』ことに繋がった。

また、メルボルン大学の授業は基本毎週 1 時間 30 分のレクチャーと 1 時間のチュートリアルで成り立っていた。レクチャーでは日本の大学と同じように大人数の学生が教授の講義を受ける。しかしチュートリアルでは学生は少人数のクラスに分けられ、チューターを中心に授業が進む中で意見をクラスに共有することを求められる。講義を聞くだけでなく、自分がどう考えるかを意識するようになった。また教授一人だけでなく、学生たちが講義で学んだ内容についてどう感じているかを聞くことは大きな刺激となった。日本の大学ではあまり見ないシステムだが、メルボルン大学のような大きな大学で莫大な数の生徒一人一人が『学ぶ』ことのできる教育システムだった。

交友関係においては、おもに前期に滞在していた学生アパートでできた友人と多くの時間を過ごした。寮には地方から来たオーストラリア人の学生も多くいたが、海外からの留学生 (International students & exchange students) が大きな割合を占める寮だった。特別親しくなった人たちは主にアジア人だったが、全員第一言語は英語だったのでコミュニケーションは英語でとっていた。日常的に英語を使っていたことは留学中の目標の一つであった語学力向上に大きく貢献したと考える。彼らと長い時間を共に過ごす中で、それぞれの国の話、またお互いの国の関係性などについて話し、考えることが多々あった。それは高校生の時に経験した交換留学とは大きく違った点である。学校生活においても、交友関係においてもただ言葉を学び、楽しく過ごすだけの留学ではなく、人の意見や話を聞き、考え、また自分自

身も発信するという機会が多くあった留學生活だった。また、それらの機会や経験は今回の留學における二つ目の目的であった、『国際的な視点を身につける』ためには必要不可欠であった。

さらに、オーストラリアという移民国家でメルボルンという多文化な街に留學したことで気づいたこともあった。それは何をもってしてオーストラリア人と判断するかということである。オーストラリアは歴史的にアジアやヨーロッパからの移民が多いが、それでも実際に行ったことのない人の多くが持つイメージはアメリカやイギリスと同じ白人の文化ではないかと思う。しかし、言うなれば原住民のアボリジニもオーストラリア人であり、人種に関係なく親や祖父母の移民によってオーストラリアで生まれ育った子供達ももちろんオーストラリア人である。彼らが自己紹介の時、『私は〇〇人でオーストラリア人』というのをよく聞いたが、日本社会ではあまり遭遇しないセリフだ。なぜならまだ日本では日本の外と中という線引きがくっきり残っているからだと思う。日本で生まれ育っていても見た目が日本人でない時、多くの場合彼らは外の人と判断されてしまうように感じる。文化においても『日本文化、日本らしさ』と言えば誰しも共通して思い浮かぶことがあるが、『オーストラリアらしさ』というのは色々な文化が混ざり合い共存していることだと思う。異なる文化や人種が隔たりなく受け入れられ新しいものを作り出していること、またそれが当たり前になっているというのは国際化する社会においてとても大変重要である。

今回の留學で得たことは将来、様々な面で活かされる。培った英語力がこれから日本でも必要になることはもちろん、オーストラリアで出会った人々や学校の授業で学んだことはこれから社会に出て働き、いろんな人と関わる中でとても役に立つと思う。何よりも相手との違いを受け入れ尊重することは日本国内外関わりなくとても大切なことである。また自分の意思、目的をしっかり持ちオーストラリアに行ったことが今回の留學で学び得たことに繋がった。留學という経験が有意義なものになるかどうかは自分次第である。これから留學に行く予定の人も自分の目標や目指すものをはっきりと定め、留學生活を過ごすことが一番大切だと思う。